

通学路の安全安心 ～ロールケーキの気づき～

大阪国際大学 「ひと・まち・であう」プロジェクト

平成 24 年 4 月 23 日に、WHO セーフコミュニティに認証されていた京都府亀岡市で起こった事故に衝撃を受け、また、その他にも子どもたちが巻き込まれる事故・犯罪を数多く耳にすることから、今回、このテーマを選んだ。

そして、調査している中で、驚きの事実が判明した。それは、全国的に交通事故数が減っている中、通学路における、6 歳～12 歳の交通事故による死亡者数は増加していたのだ。また、犯罪被害も全国的には減少傾向にも関わらず子どもの被害は横ばいであった。子どもたちの尊い命が失われる前に、何とかしなければならぬと改めて感じたのである。

1. 事件を防ぐために

事件を防ぐためには、警察・自治体・地域住民組織の連携が必要となる。しかし、上記で述べたように、子どもの被害が減少しないということは、警察・自治体には限界があるとも言える。その上、どれ程警察や自治体が連携していても、やはり 24 時間身近で子どもを見守れるのは家族や地域住民だと認識したのである。このことから、今回は、地域住民の自助・共助についての政策提案を考えようということになった。

そして、私たちは、自助と共助の間の概念も、「近助」というかたちで考え出した。それは、向三軒両隣とも言い替えられるが、共助よりも狭い視点で、隣近所の小さな変化にも気づけるような関係性として定義したのであった。

2. 京田辺市の現状

次に、京田辺市民 50 人に防犯への意識レベル調査を行なった。その結果、全体的な傾向として、防犯意識は低いと感じさせられた。また、京田辺市内で起こった死亡事故数に比べ、軽微な事故となると 10 倍以上にもなっていたのだが、これはハインリッヒの法則でも証明されているように、対応策として、田辺小学校区などでは、「ヒヤリハットマップ」が作成されていた。

3. 仮説の設定

大人と子どもでは“ヒヤリハット”する場面が違うのではないかと仮説を立てた。そこで、大阪国際大学の位置する枚方市菅原東校区の子ども 678 人に安全安心に関するアンケート調査を行ったところ、2 人に 1 人が危険だと感じる場所（通学路）があり、以前

私たち学生が作成した、菅原東校区の安全安心マップと比較すると全く違う場所となっていた。やはり、仮説は正しかったのである。大人目線のマップ（対策）ではズレが生じていたとも言えるのである。

4. 政策提案（共助・近助）

子どもの意見を重視した、ヒヤリハットマップをつくる。その際に、まちの清掃も兼ね、9小学校区ごとに作成することで京田辺市全体のマップが出来上がる。これらを行うことにより、顔見知りが増え、相互に助け合う力の向上、また、窓割れ理論でも証明されるように、清掃活動を行うことで防犯にも繋がる。そして子ども目線での危険な場所を大人が確認し、マップに落とすことで交通安全対策にもなるのである。

5. 政策提案（自助）

子どもが楽しみながら自然に学べる「一休と学ボード」を小学校で行う。これは、すぐろくのようなもので、奇数人数で実施する。安全対策に関する質問が記されているカードがあり、2つの選択肢から自分の答えと理由を述べるようになっており、討論形式を用いている。自分とは違う考えを聞いた上で、もう一度答える。最終的に、たとえば、2対3であれば、多数決で3人が1コマ進める。但し1対4になれば個人の意見を尊重するという意を込めて1人が2コマ進める。このようにして質問に答え、討論しながらゴールを目指していくのだ。こうして、普段意識しない安全安心の事象に触れる機会になり、交通安全・防犯の確認ができる。また、同年代と討論することで考える力、自分の意見を訴えかける力も身につくことが証明されている。

6. おわりに（まとめ）

自助・近助・共助・公助にはそれぞれの役割があり、それが重なり合ってよりよい安全安心なまちづくりを行う。この構造は、まるでロールケーキのように思われた。そこで、一休の日（19日）に京田辺市立小学校全校で一休ロールを食べ、その際に安全安心についての教育をする。定期的にするすることで自然に身と頭に染み込んでいくようお願いを込めた。

以上、ポイントを整理しておく、

- ・安全安心対策は、地域・自治体・警察の3つの連携の上で成立する。しかし、警察・自治体の取り組みには限界がある。
- ・大人と子どもでは危険だと感じる場所が違う。そこで、子ども目線での危険な場所を大人も一緒に確認することで、安全安心対策に繋がっていく。
- ・子どもには、楽しみながら真剣に、安全安心について考える機会づくりが必要である。